

法顕の旅

佐々木 閑

(参考資料 長沢和俊訳注『法顕伝・宗雲行紀』平凡社東洋文庫194)

1. 法顕の生涯

- ・ 『法顕伝』：別名『歴遊天竺記伝』『仏国記』
- ・ 法顕の生没年は不詳

法顕は60歳を越えてから西域へと向かい、帰国は80歳近くであった。

- ・ 法顕は東晋時代の僧侶。3歳の時に父によって出家させられ、沙弥となった。その後、20歳で受戒し比丘となった。
- ・ 中国に律蔵が欠けていることを慨嘆し、同学の慧景、道整、慧応、慧菟らと長安を出発。敦煌を経て流沙をわたり、鄯善、于闐（コータン）からパミールを越えて北インドに入り、6年後に中インドに到達した。

2. 旅の始まり

1. 399年（隆安3年）、慧景、道整、慧応、慧菟らと長安を出発後、まず西秦王乞伏乾歸の居城にある苑川に行って安居した。その後、褥檀國に至り、そこから南山山脈を越えて張掖鎮に着いた。当時の求法の旅は、行く先々でその土地の有力者の喜捨をもらいながら続けるものであったので、このように、ゆっくりしたペースになった。

2. 張掖では智嚴、慧簡、僧紹、寶雲、僧景（および慧達？）らの、渡天竺求法の僧侶がいて合流し、互いに喜びあった。

※ 慧景は途中の小雪山で死亡。道整と法顕はインドまで行くが、道整はそのままインドに残った。

3. 一行は敦煌に向かい、そこで1ヶ月を過ごした後、まず法顕ら5人が使節とともに先発し、鄯善へと向かった。その17日間の情景を語る法顕の文章は、古来、流沙紀行の名文とされる。

沙河中多有惡鬼熱風。遇則皆死無一全者。上無飛鳥下無走獸。遍望極目欲求度處則莫知所擬。唯以死人枯骨爲標幟耳。

沙河中，多く惡鬼熱風あり。遇えば則ち皆死す。一も全き者なし。上に飛鳥なく，下に走獸なし。遍望極目，度る處を求めんと欲して，則ち擬する所を知るなし，。唯だ死人の枯骨をもって標幟となすのみ。

※ この地域の砂漠については，マルコポーロが詳細に描写している。ここでは，この砂漠を渡ろうとしている者が，眠り込んだり，仲間から遅れてはぐれた時など，魔霊が自分の名を呼び，話しかけてくると言われている。その旅行者は道に迷い，死んだり行方不明になってしまう。これを防ぐために旅行者は，夜になると馬の頸に鈴をぶら下げて行くという。

4. 鄯鄯國（クロライナ）に到着。ここに1ヶ月滞在したのち，政治的状况により，南道を西へ直行せずに，カラシャール（烏夷國）へ向かった。

※ 鄯鄯國：ロプノール湖の湖畔の古代王国。もとはローラン（楼蘭）と呼ばれた。土地はやせ，俗人の衣服は大体中国と同じ。ただし，衣服が毛織物である点が違っている。国内には約4,000人の僧侶がおり，すべて小乗学。仏法はすべてインドの仏法であって，出家者はみな，インドの言語と文字を使っている。

※ カラシャール付近ではトカラ語A。クチャ付近ではトカラ語B。鄯鄯國ではクロライナ語。コータンではコータン語が用いられていたとされる。

5. そして鄯鄯國から15日でカラシャールに到着。ここには4,000人の僧侶がおり，すべてが小乗学であり，盛んであった。しかしカラシャールの人々は礼儀知らずで，待遇はきわめて悪かったという（つまりちゃんとした庇護，喜捨が得られなかったということ）。そのため，智嚴，慧簡，慧嵬の3人は，東方に引き返した。法顕たちは幸い，援助を得ることができたので，そこから西南へと直進することができた。しかしその行程は，この世のものとも思えぬほど苦しいもので，35日かけて砂漠を渡り，于闐（うてん，コータン）に着いた。于闐は南道随一の町であり，大いに賑わっており，仏教も盛んであった。慧景，道整，慧達は，先に出発

して竭叉國（タシュクルガン）に向かった。法顕たちは行像が見たかったので、3ヶ月間滞在した。

※ 智嚴：『法顕伝』ではその後の消息は書かれていないが、『高僧伝』巻三にその後の事が記されている。彼はその後、カシュミールに至り、仏駄跋陀羅をつれて中国に帰国し、長安に留まったが、中国僧からの排斥により山東に逃れた。晩年、海路で再びインドに渡り、カシュミールに行き、そこで78歳で亡くなったという。

※ 于闐：僧侶の数は数万人。僧伽藍は14もある。多くは大乗学。食事は国王から与えられる。法顕は国王からの接待で、瞿摩帝（ゴーマティ、牛糞）という名の大乗学の僧伽藍に住んだ。この寺では3,000人の僧侶がガンディーの合図で食事をする。その間、一切の音もなく、言葉を発する者もない。

※ 行像：壮大な仏陀供養の祭礼。14の僧伽藍それぞれが、日替わりで、四輪の山車に乗せた仏と2人の菩薩および諸天の像を乗せて郊外から場内へと入場させる儀礼。王と王族の人々は、王冠を脱ぎ裸足になってその山車を頭面礼足して迎える。これを、14日間かけて、14の山車それぞれについて行う。その間、王も王妃も王宮に戻ることができない。

※ 行像に関しては、岸野亮二氏による興味深い論考が出版準備中(2019年8月現在)。それによると、行像に関する詳細な記述が、「根本説一切有部律」「ニダーナ」「ムクタカ」にあることを紹介し、その部分をチベット訳、漢訳両方から和訳して提示している。それによると、行像は従来、ブッダの降誕を機縁として行われるとされていたが、必ずしもそうではなく、成道の意味を含んでいる可能性もある、とのこと。そして行道で道行きする仏陀像は、菩薩時代にジャンブ樹の下で瞑想していた時の像だということが分かる（岸野君からの原稿による）。

6. 于闐から、僧紹は胡僧とともにカシュミールに向かい、法顕らは子合国（カルガリク）へ向かった。そこに15日滞在した後、4日かけて於摩國（マムク国）に着き、そこで3回目の安居に入った（401年の6月15日から8月15日）

7. 於摩國（マムク国）で安居を終えた後、パミール山塊（葱嶺山）を登り、25日で竭叉國に到着。竭叉國はパミール山塊の中心の町。ここで先行の慧景らと合流。

国王主催の五年大会（般遮越師）を見た。五年大会は、1ヶ月ないし3ヶ月の間、王が四方の沙門に食事を布施し、さらには種々の宝物をサンガに布施し、あとでそれを買戻すという布施行。王が自分自身や家族も布施し、それを後で多額のお金で買戻す、というものもあった。

※ 竭叉國をカシュガルとする説もあるが、実際はタシュグルガンとのこと。

※ 竭叉國：ここには仏睡壺がある。石で造られ、仏鉢に似ている。仏の齒をまつる塔もある。僧侶は1,000人あまり。すべて小乗学である。衣服は中国式だが、すべて毛織物である点が違う。法要は大変立派。ここはパミールの中間地点であり、ここを過ぎると中国とは異なる風土となる。中国（漢）と共通するのは竹とザクロと砂糖黍だけである。

8. 竭叉國からパミール山塊を越える。1ヶ月でパミール山塊を踏破し、北インドの陀歴（ダレル国）に入った。ここにも多くの僧がおり、みな小乗学である。ここはインダス川の上流に位置する難所で、千仞の谷を渡る危険な道であった。崖っぶちに組んだ約700箇所の傍梯と、吊り橋を辿って進んだ（懸度の険として古来有名。『漢書』卷九六）。そこから、途中、川を渡ってスワット川の上流地方に入り、純然たるインド文化圏に属するウジャーナ国（烏__（くさかんむりに長）國, Udyāna）に入った。そこには500の僧伽藍があり、仏足石などの遺跡も多かった。

※ パミール山塊：カラコルム山脈の総称でもある。ここではタシュクルガンーギルギット間のミンタカ峠、キリク峠からバトゥラ・ムズ・ターグ付近までを指す。ミンタカ峠、キリク峠を越えるとインダス川の一支流であるフンザ川の上源に着く。ここからガンダーラ地方までを北インドと総称している。

『法顕伝』によると、パミール山塊には冬も夏も雪があり、毒龍がいるという。毒龍を怒らせると、風や吹雪が起こり、沙や小石を吹き飛ばす。地元の者はこの龍を雪山人と呼んでいる。

※ 陀歴（ダレル国）：インダス川上流、チラスChilas — コットゥガラ Kotgala間の右岸の、特にガイアGaiah付近この国に昔、羅漢がいて、一人の工人を連れて神通力で兜率天に昇り、そこで弥勒菩薩の身体を見せ、下りてからその像を造らせた。この工程を3回繰り返してようやく像が完成した。その像は高さ8丈で斎日には光で輝く。この像はいまもこの国に現存している。

『大唐西域記』にもこの羅漢と弥勒像のことが記されているが、そこでは、この羅漢とは、アショーカ王時代に布教のためにカシュミールへ派遣された末田底迦(Madhyāntika)のことだとされている。

※ ここに、「仏法東漸の最初」についての法顕の見解が示されている。このあたりの古老から聞いたところでは、インド側で弥勒菩薩像が立てられてまもなく、インドの沙門が経律を持ってこの河を渡ったという。その像が立てられたのは仏滅後300年ほどのことで、それは中国での周の平王（紀元前770-720）の時にあたる。したがって、仏法が東漸したきっかけは、その弥勒像の建立にある。漢の明帝の夢も、ここにその由来がある。

※ 漢の明帝の夢：中国に仏教が伝来した最初の事例とされる。後漢の明帝の永平三年、ある夜、金人の夢を見て、それで使節を天竺に送り、竺法蘭（ダルマラクシャ）、迦葉摩騰（カーシャパマータンガ）を招聘し、洛陽郊外に白馬寺を建てたという伝説。

9. ウジャーナ国(Udyāna)は、皆が中天竺語を使っている。仏法は盛んで、約500の僧伽藍があり、皆小乗学である。慧景、道整、慧達の三人は先発して、佛影、仏歯、仏の頂骨のある那竭國（ナガラハーラ）に向かい、法顕らはそのまま烏__國で安居に入った（4回目）

※ ウジャーナ国：僧伽藍では、余所から比丘が到着すると、三日間供養したのち、自分で落ち着き所を決めさせる。ここには仏足石が遺っている。また、仏陀が衣を乾かしたとされる石や、仏陀が悪龍を度された場所が遺っている。

10. 安居終了後、スワット国（宿呵多國、スハタ国）に到る。ここも仏法が盛んである。スワット国を経て南下、5日でガンダーラ（犍陀衛國）地方に入った。この国の人多くが小乗学である。ガンダーラ国ではジャータカにまつわる仏跡を拝観。

※ ガンダーラ国は、アショーカ王の息子のダルマヴァルダナ(Dharmavardhana, 法益)が統治した場所である。また、仏陀が菩薩であった時、ここで自分の眼を他者に施したという。その場所には大塔が建っている。

※ アショーカ王の息子のダルマヴァルダナ：別名クナーラ。クナーラ鳥のような美しい瞳を持って生まれたのでこの名がある。アショーカ王の息子の一人であったが、淫乱な継母に迫られたのを断ったため、逆恨みされて讒言により

タキシラTaxilaに移されて両目をえぐられた。流浪の身となりアショーカの都
パータリプトラに來た時、その歌声を聞いた父王が謁見したことで事実が明ら
かとなる。彼の両目は、菩提樹伽藍の瞿沙（ゴーシャ）阿羅漢の力で元にもど
ったという。

※ ガンダーラ国のジャータカにまつわる仏跡：① 割肉貿鴿処：菩薩がシビ
王であった時、逃げ込んできた鴿を救うため、鷹に鴿と同量の肉を与えるこ
とにするが、天秤の不思議な動きのせいでついには全身の肉を与えることにな
った、というジャータカの物語。② 以眼施人の処：菩薩が日月明王だった時、
路上の亡者が薬として王の眼をほしがったため、両眼をくりぬいて与えたとい
う話。

③④⑤

11. ガンダーラ国から東に7日でタキシラ（Taxila, 竺剌尸羅）に行き、昔菩薩が
頭を切って他人に布施した場所や、飢えた虎に自分の体を布施した場所を見た。ど
ちらにも大塔が建てられている。以上の4箇所の仏跡地を地元の人は「四大塔」と
呼んでいる。

※ タキシラ国：サンスクリット名はタクシャシラー(Takṣaśilā)。紀元前5世
紀から紀元後5世紀頃まで栄えた。1913年以来22年間にわたって、マーシャ
ルによって発掘が続けられる、ギリシャ文化や仏教との密接な関係が明らかと
なった。

※ 昔菩薩が頭を切って他人に布施した場所：菩薩が昔、月光王
(Candraprabha)であった時、辺境のビーマセーナ王(Bhīmasena)が悪バラモ
ンのラウドラクシャを送って王の頭を要求した。王は7日間の猶予を願い、
王妃、王臣たちと別れを惜しんだ後、自ら頭を切り落とした。

※ 飢えた虎に自分の体を布施した場所（餓虎捨身）：飢えた虎の親子に食べ
させるため、菩薩が身を投げて与えたという話。

12. ガンダーラ地方に入って4日南行してプルシャプラ（Puruṣapura, 弗樓沙國,
ペシャワール）に着いた。ここには有名なカニシカ王の建てた大塔や、仏鉢があっ
た。約700人の僧侶がいる。先に那竭國（ナガラハーラ）に行っていた慧景、道

整、慧達は、その地で仏影と仏歯と仏頂骨を供養したが、慧景が病気になり、それを看病する道整と二人はそのまま那竭國に留まり、慧達だけがプルシャプラに来た。しかし慧達は、ペシャワールにいた寶雲、僧景らとともに中国（秦土）に戻る事になった。また、慧応は那竭國の仏鉢寺で亡くなった。

※ カニシカ王：クシャン朝第3代。紀元後1～2世紀の即位とされる。アショーカ王以来の大帝国を造る。仏教を保護し、ギリシャ・イラン文化も取り入れ、ガンダーラ反映の立役者であった。その出現を仏陀は予言していたとされる。

※ 仏鉢：容量はおよそ2升。黒みがかっており、光沢がある。貧乏人が花を投げ入れるとたちまち一杯になり、金持ちが花を入れると、いくら入れても満たされない。昔、月氏の王がガンダーラ地方を征服した時、熱心な仏教信者であったため、この鉢を自国に持ち帰ろうとしたが、動かすことができなかったため大いに反省し、鉢のある処に塔と僧伽藍を建てた。その僧伽藍に約700人の僧侶がおり、朝夕、その仏鉢を、在家者と一緒になって供養している。

13. 法頭は一人で那竭國（ナガラハーラ）に向かう。那竭國の国境の醯羅城（Haḍḍa）には仏頂骨精舎がある。

※ 仏頂骨礼拝の様子：国王の命で、名家の者8人が、精舎内に封印してある仏頂骨を開くための印を持っている。彼らは朝早くに精舎に行き、互いの印を確認した後、戸を開く。手を香水で洗い、仏頂骨を出し、精舎の外の高座に置く。それは七宝の丸台の上に置かれ、上を瑠璃のドームで覆う。骨は黄白色で、4寸あり、上部は隆起している。日が昇ると、精舎の人が太鼓を打ち法螺貝を吹き、銅のドラを叩く。すると王は直ちに精舎に参詣し、東門から入って供養する。供養が終わると立ち去り西門から出る。これを毎日繰り返す。すべての者の供養が終わると、骨を精舎に戻す。精舎の門前には、華、香を売る者がいて、人々はここでいろいろ買う。

14. 仏頂骨精舎から北の1由旬で那竭國城に着く。菩薩が昔、5茎の華で定光仏（ディーパンカラ仏）を供養した処である。ここには仏歯がある。供養方法は頂骨と同じである。城の東北1由旬には仏の錫杖があり、精舎が建っている。錫杖は牛頭栴檀製で、百人千人でも動かすことができない。その西には仏の僧伽梨を祀る精舎がある。この仏の僧伽梨は日照りの時に雨を降らす効果があるとされている。那

竭國城の南には、仏の姿を残す仏影窟がある。10歩ほど離れて見ると、仏陀の姿が見える。近づくと見えなくなる。その西100歩ほどのところに、仏陀の髪と爪を祀った塔がある。これが塔の最初の手本である。今も残っている。近くの寺には、阿羅漢の塔と、辟支仏の塔がある。

15 那竭國（ナガラハーラ）で冬の3ヶ月を過ごした後、法顕、慧景、道整の3人は、南下してスレーマン山脈（小雪山、ジャララバード南方のセフィド・クフ山脈）を越えようとしたが、寒風が起こって、慧景は一步も進むことができなくなり、口から泡を吹き、「もう死にそうだから、先に行ってくれ」と言いながら息を引き取った。法顕は遺体を撫でながら号泣した。法顕と道整の二人は、スレーマン山脈を越えて羅夷國（クラム）にたどり着き、そこで5回目の安居に入った（403年）。羅夷國（クラム）には3,000人の僧侶がおり、大小乗学を兼学している。

16. 安居が終わって南下し、10日で跋那國（バンヌ）に着く。約3,000人の僧侶がおり、みな小乗学である。跋那國（バンヌ）から東に3日でインダス川を渡り、毗荼国に入る。仏法が盛んで、大小乗学を兼学している、土地の人は法顕たちの姿を見て憐憫し、「どのような辺地から来たのですか。よく出家の意義が理解できましたね」と言って旅の必要品を皆そろえてくれて、如法に接待してくれた。ここから中インドへと向かった。

3. 法顕のインド巡礼

中インド到着後の法顕の足取り：

マトゥラー（摩頭羅）

↓

サンカーシャ（僧迦施）

↓

カノウジ（罽𑖅夷城）

↓

シャーケータ（沙祇大國）

↓

コーサラ国のサーヘトマーヘト (拘薩羅國舍衛城)

↓

カピラ城 (迦維羅衛城)

↓

ルンビニ (論民)

↓

ラーマグラーマ (藍莫)

↓

クシナガラ (拘夷那竭城)

↓

ヴァイシャーリー (毘舍離國)

↓

マガダ国の首都であったパータリプトラ (摩竭提國巴連弗邑)

↓

ラージャグリハ (王舎新城)

↓

ガヤ (伽耶城, =ブッダガヤ)

↓

ベナレス (バラナシ, 迦尸國波羅捺城)

↓

サールナート (鹿野苑精舎)

↓

コーシャーンビー (拘__弥)

↓

パータリプトラを再訪, 3年間滞在。一緒に来ていた道整は, そこのサンガの素晴らしさに感動し, この地に永住することを決めた。法顕の目的は中国に戒

律を招来することであったので、道整と分かれて、一人で求法の旅を続けることにした。

↓

チャンパー（瞻波大國）

↓

タームラリプティ（多摩梨帝國）。法顯はここに2年間滞在した。

↓

スリランカ島（師子國）ここにも2年間滞在した。

1. マトゥラー（Mathurā, 摩頭羅）：約20の僧伽藍。僧侶の数は約3,000人。王は仏陀時代と同じ丁寧な作法で僧侶たちに供養している。治安がよく、戸籍や官法もなく、地代さえ払えば好きなように土地を耕してよい。厳しい刑罰はなく、罰金刑だけである。悪逆な犯罪者でも右手を切るだけで済む。人々は殺生、飲酒せず、ニラニンクも食べない。ただしチャンダーラ（旃陀羅）だけは別で、悪人と呼ばれ、別の場所で暮らしている。彼らが町に入る時は、自分で板木を打って知らさねばならない。この国では豚や鶏を飼わず、奴隷を売らず、チャンダーラ以外には屠殺者はおらず、酒屋もない。通貨としては寶貝を使っている。サンガは大いに栄え、昔どおりの作法で運営されており、客僧のもてなしも同じである。サンガの住処には、舍利弗塔、目連塔、阿難塔、阿毘曇塔、律塔、経塔がある。サンガの僧侶は大いに集まって説法し、説法後は舍利弗塔を供養し、夜通し燈火を燃やす。舍利弗が外道の弟子から仏弟子に転向した因縁を芸人たちに演じさせる。目連、大迦葉についても同じようにする。比丘尼たちは阿難塔を供養する。沙弥たちは羅云（ラーフラ）を供養する。阿毘曇たちは阿毘曇塔を供養し、律師は律塔を供養する。これらの供養は年一回行われ、日も決まっている。摩訶衍の人は、般若波羅蜜、文殊師利、光世音などを供養する。安居が終わると、人々は多くの必要品を持ってサンガに布施し、サンガは法施をする。

2. サンカーシャ（Sāṅkāśya, 僧迦施）：仏陀が忉利天（三十三天）に昇り、母のために三ヶ月間説法してから下りてきた場所。下りるとき、仏陀は奇跡によって三道の宝階を造り、仏陀を真ん中の七宝の階段を下り、梵天は右側の白銀の階段を、帝釈天は左側の紫金の階段を、付き従って下りてきた。三者が下りると、階段

は地中に沈み、上の7段だけが地上に残った。後にアショーカ王がそこに精舎を建て、その中階に丈六の仏立像を造った。精舎の後ろには石柱を立て、上にライオンの像を置いた。昔、外道の論師と沙門がそこで論争して外道の論師が勝ったが、その時、柱頭のライオンが大いに吠えて、外道は恐怖して立ち去ったという。三十三天から下りてきた仏陀が、天の香を消すために沐浴した浴室が今も残っている。ウッパラ比丘尼が初めて仏陀を礼拝した処の塔、仏の髪や爪を祀った塔、過去三仏の坐所の塔、シャカムニ仏陀の坐所の塔、仏陀の経行場所の塔、諸々の仏陀の像を作製した処の塔が立っている。梵天と帝釈天が従って下りてきた場所にも塔が立っており、比丘・比丘尼が約1,000人いて、大小乗兼学である。ここには一匹の白い耳の龍がいて、サンガのための施主となり、みなを安らかに守っている。サンガはその龍のために龍舎を作り、また、食事を作って供養している。毎日三人の出家者が龍舎へ食事を運ぶ。

サンカーシャの近くには火境という悪鬼の名前を冠した火境寺があり、仏塔が立っている。また100の小塔があるが、誰もその数を正確にかぞえることができないとされている。1つの僧伽藍があり、600, 700人の僧侶がいる。そこには辟支仏が食事を取り、泥洹に入った地がある。

※ サンカーシャのアショーカ石柱：現在のサンカーシャには存在しない。柱頭だけが残っているが、ライオンではなく象である。

※ 過去三仏：拘留孫仏、拘那含牟尼仏、迦葉仏の三仏。

3. カノウジ (Kanyākubja, 罽𑖀夷城, 曲女城) : 後の玄奘時代には戒日王の居城となった場所。ここには二つの僧伽藍があり、すべて小乗学である。近くには仏陀説法の処があり、塔が立っている。ガンジス川を渡って南へ行くと、呵梨 (Hariti) という村があり、仏陀説法の塔が立っている。

4. シャーケータ (沙祇大國) : 南門の外に、仏陀が楊枝を噛んで土に刺した処がある。その楊枝はそのまま成長し、高さ7尺となった。外道やバラモンが切ったり抜いたりしても、またもとのようにその場所に生えるという。四仏経行・坐の処があり今も塔が立っている。

5. コーサラ国のサーヘトマーヘト (sāhetmahet, 拘薩羅國舍衛城跡) : 人は少なく、わずか200軒あまりしかない。プラセーナジット王が統治した処。大愛道(マ

ハーブラジャーパティール) のもとの精舎跡, 須達長者 (給孤独長者) の井壁, 鶯掘魔 (アングリマーラ) が得道し, 焼身泥洹した処などがあり, 塔が立っている。城の南門から出て1,200歩行ったところに祇園精舎がある。池水はきれいで樹木茂り, 花々が咲き乱れる美しい場所である。

ここには「最初の仏像」がある。三十三天で仏陀が母に説法している時, 仏陀に会いたいと思ったプラセーナジット王は, 牛頭栴檀で仏像を作り, 仏の坐処に置いていた。仏陀が戻ってくると, その仏像は仏坐から立ち上がり, 外に出て仏陀を迎えた。仏陀は「そのまま座っていなさい。私が涅槃した後の手本となるでしょう」と言ったので, 像はもとの坐に戻ったという。これがすべての仏像の始めである。祇園精舎はもと, 7階建てであったが, ネズミが燈心を啜ってため火事となり燃え尽きてしまった。しかし仏陀の木造は燃えずに残ったので, 新たな2階建ての精舎を建てて安置した。法頭が祇園精舎を訪ねると, 僧侶たちが出てきているいる訪ねた。漢の国から来たと告げると大いに感嘆し, 「辺地の人がよくここまで来られたものだ。いまだかつて漢の道人がここまで来たのを見たことがない」と言った。精舎の北西には得眼 (アングヴァナ, Andhavana) という林がある。昔, 500人の盲人が住んでいて, 仏陀の説法を聞いて目が見えるようになった。喜んだその人たちが盲人の杖を地面に突き刺し, それが育ってこの林になったのである。祇園精舎の東北には, 毗舍佉母が建立した精舎が残っている。祇園精舎の境内は, 給孤独長者が金銭を敷いて買った土地である。スンダリー (Sundarī) が身を殺して仏陀を誹謗した場所もある。祇園精舎の東門を出てすぐのところに, 昔, 仏陀が96種の外道と論議した場所がある。その場において, 外道女のチンチャー・マーナヴィカー (Cañcāmānavikā) は仏陀を陥れようと, 衣の下に詰め物をして妊娠しているかのような格好で「ゴータマに孕まされた」と周囲の人々に告げ回った。これを見た帝釈天が, 白鼠に化けて腹帯を食いちぎり, 詰め物が下に落ちて, 彼女の嘘がばれてしまった。チンチャーは生きたまま地獄に落ちた。また, デーヴァダッタ (調達, Devadatta) が毒爪で仏陀を殺そうとした場所も残っている。論議のあった場所には精舎が建っており仏陀の坐像が安置されている。その向かいには影覆という名の外道の天寺 (祠) がある。この中インドには96種の外道がおり, それぞれに教団をつくっている。彼らは乞食はするが鉢は持たない。外道の信者たちは福德のために道の横に福德舎 (puñyaśāla) を立て, 旅人や出家者に食事や宿を提供している。デーヴァダッタの信者さえいる。彼らは過去三仏は供養するがシャカムニ仏陀は供養しない。 舎衛城の東南に, 瑠璃王 (ヴィドゥーダバ王, Viḍūḍabha) が釈迦族を攻

め滅ぼそうとした時に、仏陀が道の側に立っていた処があり、塔が立っている。舎衛城の西に都維という村があり、ここには迦葉仏が生まれ、泥洹した場所であり、迦葉仏の全身の舍利もあって、そのそれぞれに塔が立っている。東南には拘留孫仏が生まれ、泥洹した場所である那毗伽(Nabhika)という村がある。そこから北には、拘那含牟尼仏が生まれ、泥洹した場所である村がある。

※ スンドリー(Sundari)が身を殺して仏陀を誹謗した場所：外道が仏陀をおとしめるため、遊行女スンドリーを口説き落として、わざと仏陀にまとりつかせて、それを周囲の人たちに見せる。その後、外道たちはスンドリーを殺し、祇園精舎の境内に埋めた。それをあとで発見したようにみせかけて仏陀にスンドリー殺しのぬれ衣を着せようという計画であったが真相が明らかとなり、外道たちは却って世間の信用を失うこととなった。

※ 瑠璃王（ヴィドゥーダバ王, Viḍḍabha）が釈迦族を攻め滅ぼそうとした時：コーサラ国プラセーナジット王の息子。釈迦族の卑女を母として生まれた。釈迦族を憎悪し、父王を殺して王位を奪った後、釈迦族を皆殺しにしようとする。一度は道の側に立った仏陀に説得されて引き返すが、我慢しきれず、ついに釈迦族を滅ぼしてしまう。この時に連れ帰った500人の美女が自分になびかないのを憎んで全員を惨殺する。さすがの仏陀も、この悪行を見て我慢できず、「7日後に焼け死ぬであろう」と予言する。これを恐れた瑠璃王は、7日後、宮女と一緒に池に浮かべた舟の上にいるが、突然舟がひっくり返り、炎に包まれて無間地獄に落ちたとされる。

6. カピラ城（迦維羅衛城, Kapilavastu）：誰もおらず、荒れ果てている。道路には白象やライオンが出没して恐ろしい。みだりに行ってはならない。白飯王（浄飯王）の故宮跡には、太子が白象に乗って母親の胎内に入る像がある。その他、四門出遊の場所、アシタ仙人（阿夷）が太子の相を見た場所、武芸を競った場所、仏陀となった後に里帰りして父王に会った場所、500人の釈迦族の者が出家して、ウパーリ（優波離）に向かって礼をし、大地が六種振動した場所、仏が諸天のための説法し、その間は父王も入ることができなかった説法の場所、大愛道が仏陀に僧伽梨を布施した場所、瑠璃王に攻められた時、釈迦族が皆、須陀洹を得た場所などがあり、塔が立っている。

7. カピラ城の東50里にルンビニ（論民, Lumbini）がある。摩耶夫人は池で沐浴してから北岸を20歩あゆみ、手で樹の枝をつかみ、東を向いて太子を生んだ。生まれた太子は7歩あるき、2匹の龍王が太子に水をかけて水浴させた。そこには後に井戸が掘られた。そして池の水は、いまではサンガの僧侶たちが飲んでいる。

※ ここに四處常定（仏陀の重要な場所）として、一、成道處。二、轉法輪處。三、說法論議伏外道處。四、上忉利天爲母說法來下處があげられている。『涅槃經』などに出る、出生、成道、初轉法輪、涅槃とは別の4種である。

8. ラーマグラマ（藍莫, Rāmagrāma）：ルンビニから東へ5由旬。この国の国王は仏滅後、仏舎利の一分（八分の一）をもらって帰り、国に仏塔を建てた。ラーマグラマ塔という。傍に池があり、池の中の龍が常にこの塔を守っている。アショーカ王が現れて、八塔を壊して仏舎利を集めようとした時、この龍が現れ、アショーカ王を連れて竜宮に案内し、「あなたの供養が、ここにあるものよりすぐれているなら、仏舎利を持って行っても構わない」と言った。とうていかなわないのを見て取ったアショーカ王が、この塔を壊すのはあきらめて帰って行ったという。この塔は大変荒れ果てており、掃除をする者もない。象の群れが鼻で水を注ぎ、花々を供養しているだけである。ある出家の道人が、これを憂えて、大戒を捨てて沙弥となり、自ら草木を引き抜いてあたりを整備し、国王に勧めてサンガの住処を作り、自分がその寺の主となった。それ以来、今に至るまで、この地の寺主は沙弥である。ここから東に、太子がチャンナと白馬（カンタカ）を帰らせた場所があり、塔が立っている。さらに東に行くと炭塔（舎利八分の際に仲裁の労を取ったドロナに謝礼として与えられた残りの炭灰を祀った塔）があり、僧伽藍が建っている。

9. クシナガラ（拘夷那竭城, Kusinagara）：人はきわめて少なく、僧侶も少ない。沙羅双樹で仏陀が北を枕にして涅槃に入られた場所、須跋（Subhadra）が最後に得道した場所、世尊を金棺に納めて7日間供養した場所、金剛力士(Vajrapāṇi)が金杵を捨てた場所、八王が仏舎利を分骨した場所などがあり、いずれも塔が立っていて僧伽藍がある。近くには、仏陀の後を追いかけようとするリッチャヴィ族の者たちを止めるために仏陀が深い堀を化作した場所がある。そこで仏陀は彼らに形見として仏鉢を与え、それで彼らは納得して家に帰ったとされる。そこには石柱が建てられ、銘が彫られている。

※ 金剛力士が金杵を捨てた場所：仏滅を悲しんだ金剛力士が、金杵を捨てて沙羅双樹の側で気絶したという。

10. ヴァイシャーリー（毘舍離國, Vaisālī）：北には大林重閣精舎、仏の住まわれた場所、阿難半身塔がある。アームラーパーリーの家には仏のための塔が建てられ、今もそのまま残っている。南にはアームラーパーリーのマンゴー園がある。仏陀は最後の旅においてヴァイシャーリーを振り返り、「これが私の最後の遊行処である」と言われた。仏陀は「私は三ヶ月後に涅槃に入るであろう」と言ったが、魔に魅入られていた阿難は、仏陀に命を延ばすよう請わなかったのである。東に行くと、仏滅100年の十事の論争において比丘たち700人が集まった場所があり、塔が立っている。東に行くと5つの河が合流するところがある（ヴァイシャーリーからパトナに行く途中）。ここで阿難が涅槃に入った。

※ アームラーパーリー：リッチャヴィ族の若者たちとの間の、佛陀招待競走の話が有名。

※ 阿難が涅槃に入る話：昔、阿難はマガダ国からヴァイシャーリーへ向かう途中で涅槃に入ろうとした。これを天から聞いて知った阿闍世王は、人々を率いて阿難を追った。一方、ヴァイシャーリーのリッチャヴィ族の者たちも、阿難が来ると聞いて迎えるために対岸で待っていた。河を渡っていた阿難は、後ろ岸は阿闍世王たち、向岸はリッチャヴィ族の板挟みとなり、どちらに進んでも、反対側の人たちから恨みをかうことになるので、河の中央で、火光三昧に入って身を焼いて涅槃した。そして身体を二つにし、それぞれを2つの川岸に分けた。そこでそれぞれの者たちは阿難の半身を持ち帰り、阿難半身塔を建てたという。

11. マガダ国の首都であったパータリプトラ（摩竭提國巴連弗邑, Pāṭaliputra）：アショーカ王の首都。王宮は鬼神が造ったものとされ、今もそのまま残っている。アショーカ王の弟は若い頃傲慢であったが諭されて仏道に入り、阿羅漢となった。その阿羅漢の弟は、耆闍崛山（グリドラクータ）に住み、独住を楽しんでいた。兄のアショーカが、「供養したいので来てほしい」と頼んでも、山の生活が好きで、頼みを断っていた。そこでアショーカは、鬼神たちに命じて大石を運ばせ、城の内側に大石山を造らせた。それがこの王宮であるという。今はその大石山の底部の石室に、大乘バラモンのラージャスバルマ（羅沃私婆迷）という者が住んでおり、皆

から尊敬されている。アショーカ王塔の付近に、摩訶衍僧伽藍があり、とても美しい。また、小乗の寺もあり、計600-700人の僧侶がいる。大乘バラモンの師である文殊師利という人もこの摩訶衍僧伽藍に住んでいて、諸々の大乘の比丘たちに尊敬されている。パータリプトラは中国（中インド）最大の都市であり、毎年2月には盛大な行像の儀式が行われる。この国の長者や居士は、各が城中に福德医薬舎を建てており、国中の貧窮者、孤独者、障害者、病人はここに来て種々の供給を受ける。医者もいて、薬ももらえる。アショーカ王が7塔を壊して新たにたてた84,000の仏塔のうちの第一番目の塔が近郊に建っている。塔には「アショーカ王はこの閻浮提において、四方サンガに布施し、それを金銭であがなうことを三度繰り返した」という銘題が彫られている。そこにはアショーカ王の石柱がある。塔の北側に、アショーカ王が地獄（泥梨城）を造った場所がある。そこにも石柱が立っていて上に獅子がのっている。石柱には、アショーカが地獄を造った因縁と年数と月日とが記されている。

※ アショーカ王の弟：ティシュヤなどの名で知られる。若い頃は驕慢であったが、アショーカ王から「お前を死罪にするが、7日間だけは王位につけてやるから自由に楽しめ」と言われ、死期を見つめるうちに改心し、ついには阿羅漢になったという。

12. ラージャグリハ（王舎新城, Rājagṛha）：パータリプトラから東南に9由旬で一小孤石山（帝釈窟山, Indrasailaguhā）のこと。王舎城から約10キロ。山の頂上の石室にいる仏陀を、帝釈天が天樂般遮（Pañcasikha）を率いて、琴の音で楽しませたという。このとき帝釈天は42の事柄を質問したが、仏陀は指でいちいちその答を石に書いた（『長阿含経』『仏説帝釈所問経』）。その石は今も残っている。ここにも僧伽藍がある。一小孤石山から南東1由旬に那羅(Nalaka)という村があるが、ここは舎利弗の生地である。舎利弗はここで生まれ、ここに戻って般涅槃した。塔が今も残っている。そこから西に1由旬で王舎新城がある。ビンビサーラ時代の城を王舎旧城と言い、その北方に阿闍世王が造ったのが王舎新城である。城の外、すぐのところに、阿闍世王が八分の一の仏舎利を祀って建てた仏塔がある。新城の南、五山に囲まれたところに、ビンビサーラ王が建てた王舎旧城がある。ここには、舎利弗・目連が初めてアシュヴァジット（アッサジ、馬勝）比丘に遭った場所、ニルグラント（ジャイナ教の祖）が火坑・毒飯で仏陀を殺そうとして招いた場所、阿闍世王が黒象に酒を飲ませて仏陀を殺害しようとした場所、耆旧（Jivaka）がアンババ

一リー園に精舎を建立し、仏陀と1,250人の比丘を招いて供養した場所などがある。城自体は荒れ果てて、人はいない。

※ 王舎城：アショーカ王の首都パータリプトラがこう呼ばれることもある。

※ ニルグランタ（ジャイナ教の祖）が火坑・毒飯で仏陀を殺そうとして招いた場所：ニガンタナータプッタがこのようなことをしたという記録はない。

『大唐西域記』巻九によると、ニルグランタ外道の勝密という者が、そのようなことをした、という。

13. 王舎城から東南に登っていくと、耆闍崛山（グリドラクータ、靈鷲山）に着く。頂上の手前の石窟で仏陀は坐禅をなさったという。そのさらに手前には阿難が坐禅した石窟がある。魔が鷲となって坐禅している阿難を怖がらせたが、仏陀が阿難の肩をなでたので恐怖がおさまったという。その時の鳥の跡や手の孔が今も残っている。それでこの石窟は鷲窟（ちょうしゅうくつ）と呼ばれる。仏が石室の前で経行なさっているところにデーヴァダッタが石を投げ落とし、仏陀の足を傷つけた場所もある。その石は今も残っている。仏陀の説法堂は今はない。法頭は耆闍崛山に登って華香・燈火で供養し、「仏は昔ここにおられて、首楞嚴を説かれた。私は生きて仏陀にお会いすることができず、ただその遺跡を見るだけである」と感慨無量であった。そして石窟の前で『首楞嚴経』を誦し、そこで一晩過ごした。城の北、300歩のところにカランダカ竹林精舎がある。今も残っており、僧侶が掃き清めている。また少し離れたところに死体捨て場（尸磨しゃ那）がある。ピッパラ窟という石室があり、仏陀は食後、ここで坐禅をなさった。山の北側には車帝窟（七葉窟, Saptaparnaguḥā）という石室があり、仏滅後に大迦葉を中心に500人の阿羅漢がここに集まって經典をした（第一結集）。その時には、仏陀、舎利弗、目連という3人のために3つの空座が設けられたという。他に、デーヴァダッタの石室というものもある。山には、大きな四角い黒石があるが、昔一人の比丘がこの黒石の上で経行し、無常・苦・空を観察し、不浄観を得て、刀で自殺しようとした。しかし世尊が戒を定めたことにより自殺はできない。とはいえ、自分はただ三毒という賊を殺そうとしているのだと思い直し、刀で自分の首を切った。すると、その行為の第1歩で須陀洹を得、途中で阿那含を得、最後で阿羅漢果を成就して般涅槃したという。

※ 『首楞嚴經』：『首楞嚴三昧經』。法顕以前のものとしては、支婁迦讖、竺法護、竺叔蘭の三訳がある。

※ ピッパラ窟：ここで第一結集が行われたとも言われている。

14. ガヤ（伽耶城, Gaya）：城内は荒れ果てている。近くに、菩薩が6年間苦行した場所、仏陀の沐浴し、天が樹枝を差しのばした場所、メーカー女(Mekā)から乳粥をもらった場所、菩薩がそれを召し上がった大樹の下石台などがある。一つの石窟があり、菩薩がその中で結跏趺坐し、「もし私が成道するなら、なにかの奇瑞があるに違いない」と念じた処である。今もそこには仏影が現れている（前正覺山仏影石窟）。

（以下、菩提樹に行って魔を退散させるまでの仏陀の行動が示される。その各の場所に塔が建てられている）。

- 1) 諸天が仏陀に「ここは成道の場所ではありません。ここから西南にある貝多樹(aśvattha)の下こそが三世の諸仏の成道の場所です」と告げる。そこで仏陀は貝多樹へと向かう。
- 2) 途中で諸天が吉祥草(kuśa)を与える。
- 3) 500匹の青い孔雀が飛んできて、菩薩のまわりを3回まわって飛び去った。
- 4) 菩薩は貝多樹の下に来て、吉祥草を敷き、東向きに座った。
- 5) 魔王が3人の美女を遣わし、魔王自身もやって来て修行を妨害しようとするが、菩薩が足の指で地面をなでると、魔軍は撤退し、3人の美女は老女に変わった。

この他にも、成道後に仏陀が7日間、樹を見て解脱の楽しみを味わった場所、7日間経行なさった場所、諸天が七宝堂をつくって7日間仏陀を供養した場所、文鱗盲龍(Mucalinda)が仏陀をとぐるで守った場所、尼拘律樹下の四角い石の上で東に向いて坐った仏陀に梵天が勧請した場所、四天王が鉢を献上した場所、500人の商人が蜜菓子献上した場所、カッサパ3兄弟と弟子1,000人を度した場所にも塔が建てられている。

※ 蜜菓子を献上したのはタプッサ、バツリカではなく、500人の商人とされている。

仏成道の場所には3つの僧伽藍が建っており、僧侶が住んでいる。彼らの威儀は仏陀当時と同じで立派である。

(『法顕伝』ではこのあと、貝多樹すなわち菩提樹にちなんだ事件として、アショーカ王による地獄施設の建設と、仏教比丘との出会いによる改心、そして菩提樹 bodhi を女性だと勘違いして嫉妬した王妃によって菩提樹が枯らされそうになった故事が紹介される。詳細は略)

15. 貝多樹から南に行ったところに鷄足山(Kukkuṭapadagiri)という山があり、その地下深くに今も大迦葉がいると伝えられている。そこに通じる孔の外には、大迦葉が手を洗ったとされる土がある。土地の人は、その土が頭痛に効くと信じている。

この鷄足山の山中には今でも多くの阿羅漢が住んでいる。諸方から大迦葉を供養するために多くの人が集まってくるが、夜になるとそこに羅漢がやってきて、ともに論議し、人々の疑いがなくなると、忽然として消えるという。この山は猛獣が多く、むやみには入れない。

16. ベナレス (バラナシ, 迦尸國波羅捺城, Bārāṇasī) : 法顕は、一旦パータリプトラに戻り、そこからカーシー国のベナレスへと向かった。途中に曠野(Āṭavika)という名の精舎がある。そのベナレスから東北10里ほどのところに仙人鹿野苑精舎(Rṣipatana Mṛgadāva)がある。ここにはもと、辟支仏が住んでいたが、世尊が7日後に成道なさるとの言葉を諸天から聞いて、ただちに涅槃に入った。それでここを仙人鹿野苑と呼ぶ。以前の仲間であった5人の修行者は仏陀がやって来るのを見て「挨拶しないようにしよう」と言い合ったが、仏陀が近づくと思わず立ち上がって礼をしたという。そしてそこで初転法輪をなさったのである。その北20歩のところには、仏陀が弥勒のために授記なさった場所がある。さらに50歩南にはエーラーパットラ龍が仏陀に、「私はいつ畜生の身から解放されるのでしょうか」と訪ねた場所がある。鹿野苑には2つの僧伽藍がある。

※ 初転法輪の5比丘：憍陳如（カウディンヤ），馬勝（アシュヴァジツト），小賢（バドリカ），十力迦葉（ダシャバラ・カーシャパ），摩訶男拘利（マハーナーマ・クリカ）。

※ エーラーパットラ龍：過去の悪行のせいで龍の身に生まれたが、迦葉仏に会って、未来におけるシャカムニ仏陀の出世を教えられ、シャカムニに会った

時、このように尋ねたとされる。仏陀の答は「仏道に帰依し続けるなら、弥勒仏の時に人になることができるであろう」というものであった。

17. コーシャーンビー（拘__弥, Kauśāmbī）：鹿野苑の北西13由旬にある国。精舎は瞿師羅園(Goṣila)という。いまも多くの僧侶がいて小乗学が多い。

18. 達しん（くちへんに親, Dakṣiṇa）：（法顕はここには行っていない。伝聞としての記録）。南方の国（ブッダゴーサによるとガンジス川以南とされる）。ここには迦葉仏の僧伽藍がある。名前は波羅越(Pāravata, 鳩の意)。大石山を穿って造られており、5層になっている。1階は象の形で500間の石室がある。2階はライオンの形で400間の石室がある。3階は馬の形で300間の石室がある。4階は牛の形で200間の石室がある。5階は鳩の形で100間の石室がある。最上階に泉があり、その水はそれぞれの石室の周囲を曲がりながら流れ、徐々に下層へと流れ下っていく。各室には窓が穿たれており、明るくて闇がない。今は梯で上階に登るが、昔の人は巨大だったので、一足で登れた。この寺には阿羅漢が住んでいる。一般人はおらず、遠く離れたところに心根の悪い人々が住んでいるだけである。この国の人々は、修行者は空を飛ぶものだと思っているので、諸国から礼拝しに来る修行者がいると、「あなたはなぜ飛ばないのか」と質問して困らせる。修行者は「私はまだ羽根ができていないので飛べないのです」と答える。達しんはひどく陰悪な地方で、道路もひどい。そして通行税を国王に払わねばならない。払うと国王は案内人をつけて次々に伝送してくれる。法顕は結局、ここには行くことができなかった。

19. パータリプトラを再訪：3年間滞在。律を求めて来たが、北インドでは、師匠ごとに口伝で伝えるので、書写すべき本もなく、探し求めて中インドまで来た。そしてパータリプトラの摩訶衍の僧伽藍で『摩訶僧祇律』を得た。『摩訶僧祇律』は最初の大衆が行ったものであり、祇洹精舎に伝わっていた。十八部それぞれに大同小異の律があるが、この律はもっとも広く説き、つぶさに意を尽くしている。その他に薩婆多衆の抄律を得た。およそ7,000偈から成っている（この抄律を法顕は訳していない）。また、『雜阿毘曇心論』も得た。約6,000偈である。また2,500偈の線經も得た。また一卷5,000偈の『方等般泥洹經』を得た。また摩訶僧祇の阿毗曇を得た。

ここに3年間滞在し、梵書と梵語を学び、律を書写した。一緒に来ていた道整は、そのサンガの素晴らしさに感動し、中国のサンガに戒律がないことを嘆き、この地に永住することを決めた。法顕の目的は中国に戒律を招来することであったので、道整と分かれて、一人で求法の旅を続けることにした。

※ 『摩訶僧祇律』、薩婆多衆の抄律、『雜阿毘曇心論』、線經、『方等般泥洹經』、摩訶僧祇の阿毗曇。このうち『摩訶僧祇律』と『雜阿毘曇心論』と『方等般泥洹經』はその後、漢訳されたが、薩婆多衆の抄律、線經、摩訶僧祇の阿毗曇は未訳のままになった。

20. チャンパー（瞻波大國）

仏跡を巡礼し、マガダ国では『摩訶僧祇律』『薩婆多律抄』『雜阿毘曇心論』『えん經』などを得た、PARTARIPTURAの天王寺には3年間滞在してサンスクリットを学習し、律本を書写した。さらにはガンジス川を下ってタマリプティ国に至り、ここでも2年間滞在した。

スリランカから海路中国へ

1. 商船に乗ってスリランカ（師子国）に至り2年間滞在し、ここで『五分律』『長阿含經』『雜阿含經』『弥沙塞律』などを得た。スリランカでは各地を巡歴し、無畏山派の僧伽藍で青玉像を礼拝もしている。長安を出た時は仲間は10人以上いたが、インドに留まったり病没したりして次々といなくなり、この時点では彼一人となっていた。

2. スリランカで2年を過ごした後、商船に乗って中国を目指す。出帆3日目に大暴風となり、水漏れして沈みそうになったため、皆が重そうな荷物を海に捨てた。法顕も瓶などを捨てたが、經像だけは救いたいと願い、観音菩薩を一心に念じていた。暴風13日目にニコバル諸島の島に漂着。多少の修理をして再び海に出て、90日余りかけてようやく耶婆提国(Javadvīpa, ジャワあるいはスマトラ東南部)に到着。そこで5ヶ月滞在し、別の船に乗り換えて広州に向けて出帆した。法顕は船上

で安居に入った。出帆1ヶ月余りたって突然、暴風雨となり、皆が青くなった。船員たちはバラモンであったため、この暴風雨の原因は法顕だと考えて、彼を途中の島で下ろしてしまおうとするが、法顕の檀越がとりなしてくれたおかげで事なきを得た。船は70日以上かかって、412年に山東省青島の東（青州長広郡）に漂着した。

3. 太守の李暹は仏教信者であったので、一人の沙門が経典と仏像を持って海を越えてやってきたと聞き、海辺まで迎えに出た。そこで一年間の接待を受けた後、安居終了後、南に下りて都の建康に行き、そこで仏駄跋陀羅について、道場寺で六巻泥洹経、『摩訶僧祇律』，方等泥洹経、『雜阿毘曇心』などを訳出した。

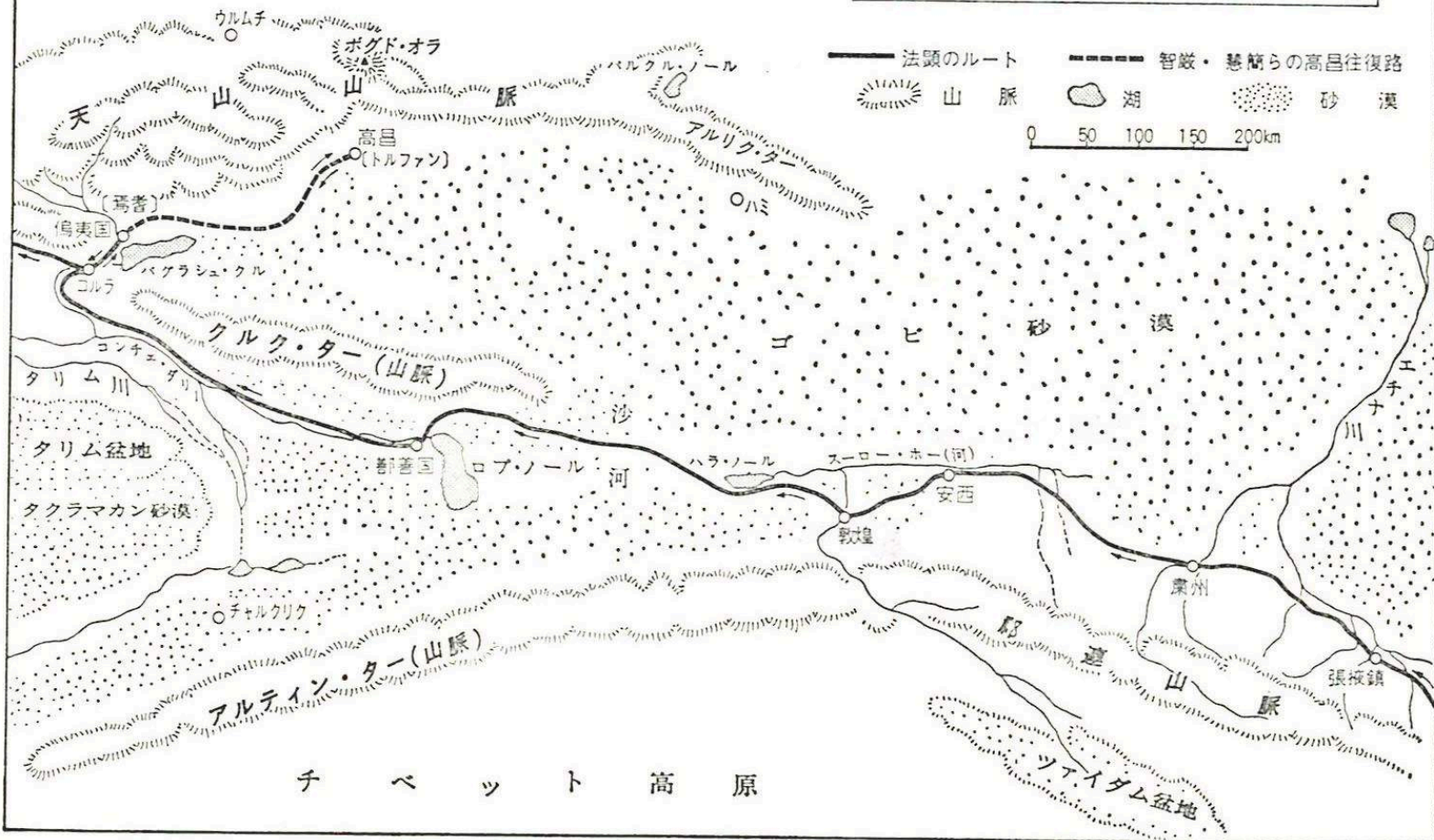
足かけ14年の間に27ヵ国をまわる大旅行であった。

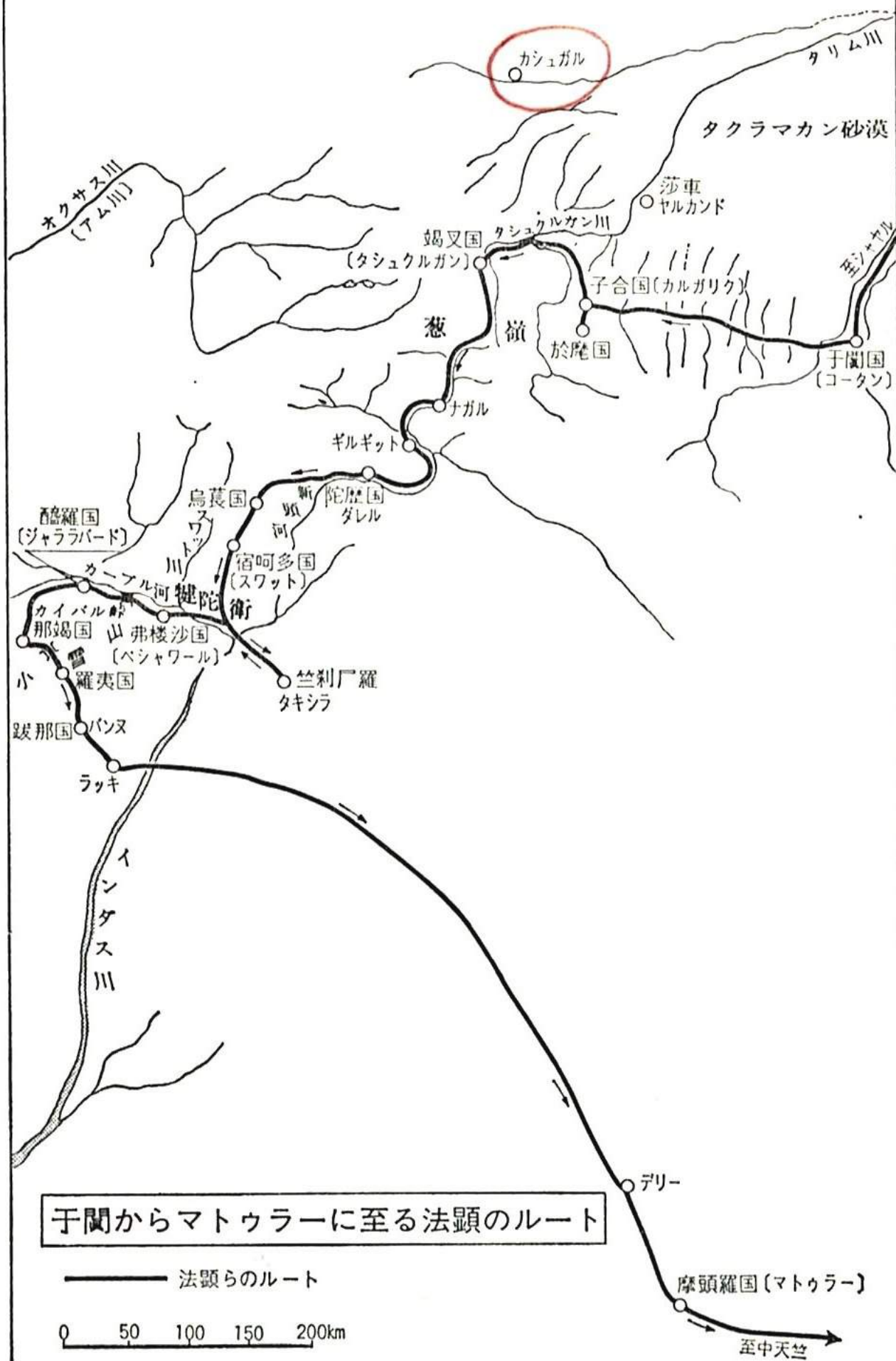
○ 法顕は、到着地の青州刺史（しし），劉道憐に一年間接待され、ここで安居を行った。その後、長安に行きたいと願ったが、動乱のせいで行くことが叶わず、南下して建業に向かい、そこで仏駄跋陀羅とともに訳経作業を続けた。

○ 414年、建業で書いた旅行記が『法顕伝』である。この本は、彼の後に続いた西域求法僧のもっともすぐれた旅行手引書として活用された。そのころから、『摩訶僧祇律』四十巻、『大般泥洹経』六巻、『雜阿毘曇心論』十三巻など、六部六十三巻を訳した。

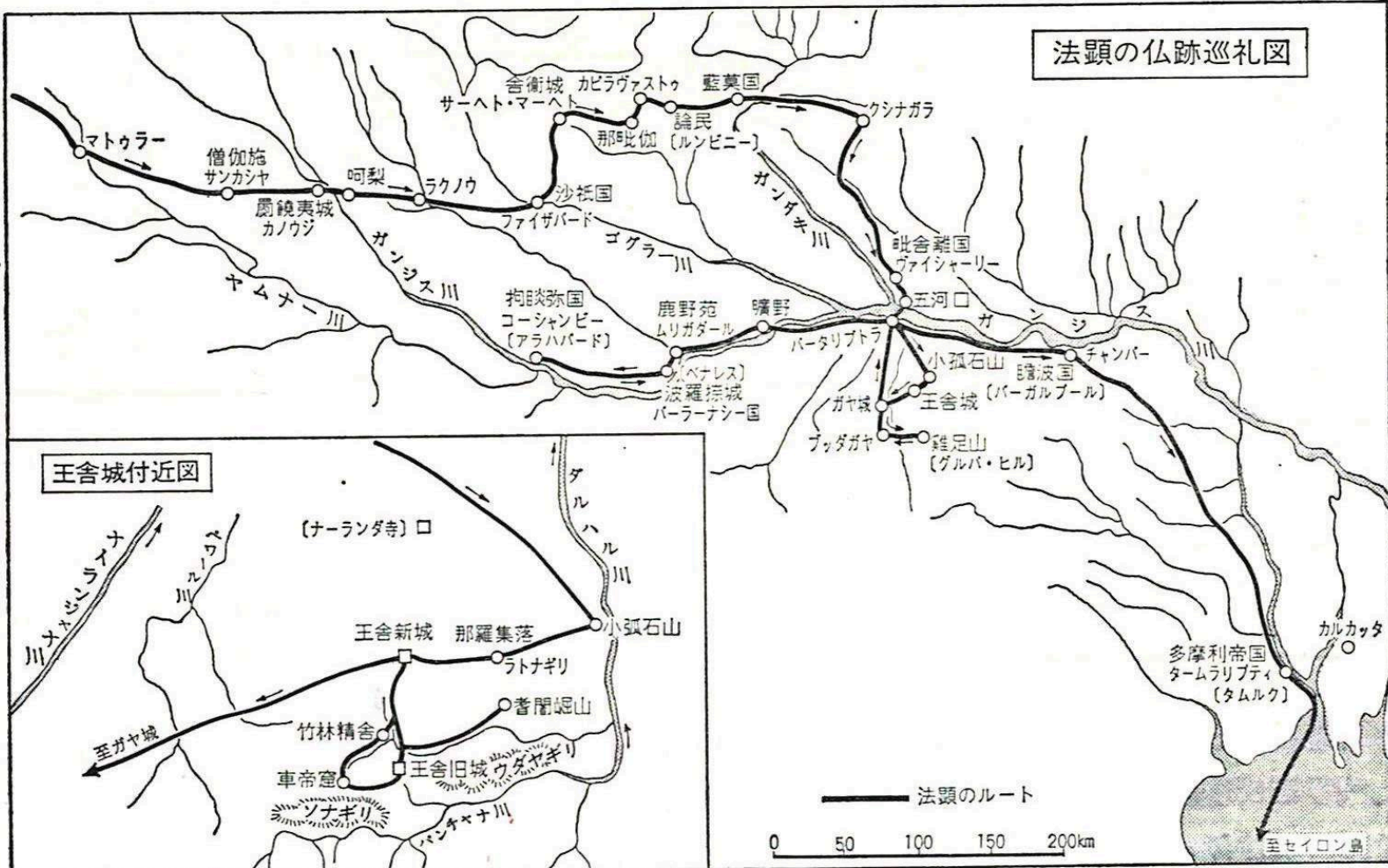
○ 享年82歳とも86歳とも言われる。

法顯の張掖鎮から僞夷国に至るルート

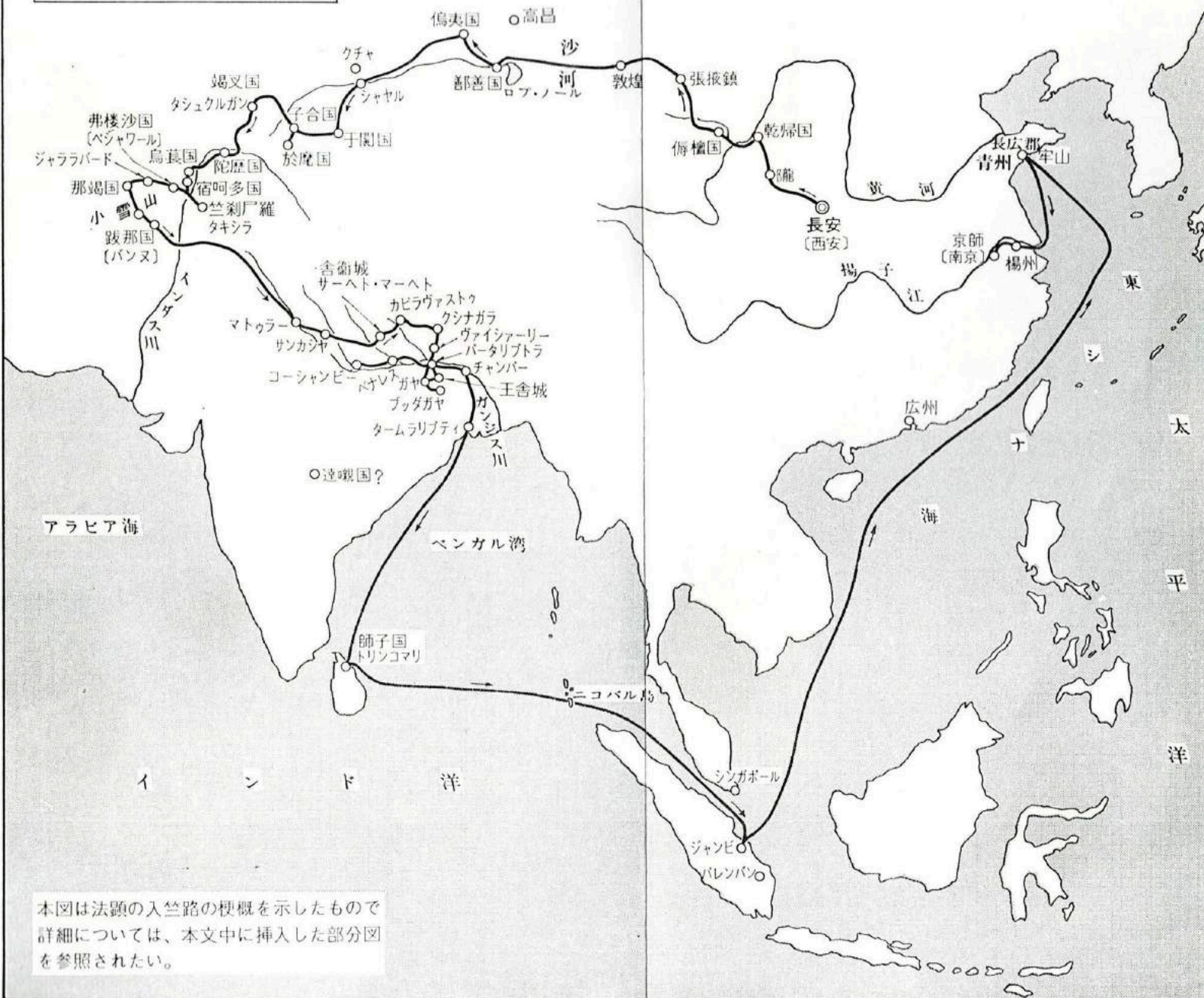




法顯の仏跡巡礼図



法顯求法入竺旅行地図



本図は法顯の入竺路の梗概を示したもので
詳細については、本文中に挿入した部分図
を参照されたい。